

帰国を控えた短期滞在留學生の調査 — 先行研究との比較による検討 —

中崎 崇志・櫻田 千采・松下美知子

1983年に留學生10万人計画が提言されて以来、来日する留學生の増加に伴って、受け入れる側の環境は大きく変化した。日本の高等教育機関でも、留學生の多様なニーズに応じたコースを準備するなどの対応をおこなっている。本学でも1998年10月に、必ずしも日本語を必要としない短期留学プログラムを開始し、日本で学びたい留學生の受け入れをおこなっていることなどは、その一例である。

このような、研究上・修学上の受け入れシステムの構築と共に、留學生数の増加は、生活習慣や食習慣等、文化的適応についての多様性とも関連し、留學生生活全般に渡る支援体制を整える必要性も生じてきている。

こうした問題について、現在日本で留學生生活を送っている海外からの留學生に対して、各大学の留學生センターごとに様々な調査がおこなわれ、彼らの留学目的や学習・研究の状況、生活上の困難などを把握し、それへの対応が検討されている。また、それらを元に、留學生に対する支援体制についての検討も進められている (e.g., 東京大学留學生交流委員会・留學生生活実態調査専門委員会, 2000; 松下・中崎・林・島・櫻田, 2000)。

さらに、留學生生活を終えて帰国した留學生に対しても調査が実施されている。質問紙の回収が困難であるなどの問題があるために実施が難しく、調査例は少ないものの、これらの調査によって、現在進行形の留學生では認知しにくい様々な問題を明らかにし、留学の全行程への総合的評価を得ることができるため、留學生受け入れと支援体制の改善のための情報の入手が可能である (松下ら, 2000)。

本論文は、帰国を直前に控えた短期滞在の日本体験型留學生に対して実施した面接調査を元に、留學生生活全般と大学の留學生支援に関する分析をおこなうものである。

I. 手続き

【調査対象者】

金沢大学に1年以内の短期間滞在した留學生のうち、日本語による質問に答えられる日本語レベルをもつ学生35名を対象とした。対象者の内訳は、日研生18名 (男性 8

名，女性10名），短期プログラム生16名（男性7名，女性9名），その他1名（女性）であった。年齢層は20歳から30歳であった。

対象となった留学生の出身国は，アメリカ，ブルガリア，中国，タイ，アイルランド，イスラエル，インド，イギリス，オーストラリア，カザフスタン，チェコ，デンマーク，ポーランド，韓国，フィンランド，ロシアであった。

【調査時期】

2001年7月から8月の間の，各留学生の帰国直前の時期に実施した。日本を離れる直前であるこの時期は，日本留学の総合的な評価を得ることができると考えられるためである。

【実施方法】

半構造化された質問紙（資料参照）を用意し，それに基づいて1対1の口頭で質問し，回答をテープレコーダーで記録した。各設問は，選択肢式で回答する形式の部分と，その選択肢の内容について自由に回答する形式の部分の両方を含んでいた。

II. 結 果

調査は，「プロフィールデータ」，「日本語学習に関する設問」，「留学生生活全体に関する設問」の3点で構成されている。本論文では，過去におこなわれた帰国留学生への調査（松下ら，2000）におけるデータとの比較をおこなうため，主として「留学生生活に関する設問」を取り上げた。以下で取り上げる結果は，各選択肢の合計と，自由記述の内容に基づいたものである。

本調査は，松下ら（2000）の調査が終了した後におこなわれたものであり，この調査で指摘された問題点などについて，その改善の程度などが，本調査の回答から明らかになると考えられる。

1. 留学の意義について

留学の意義については，「あなたにとって，留学は意義深いことでしたか」という問いに，35名中25名が「意義があった」と回答した。特に意義のあったこととして，異文化体験を挙げる留学生が多かった（15/25名）。それも，日本という国単位ではなく，金沢という土地柄，あるいは金沢大学といった特定の場所との関連を述べた回答が多い。金沢の気候風土や伝統文化を挙げた回答では，「古い街，伝統的なものが残っている」「金沢の冬を体験したことで季節を実感した」「金沢の人は優しかった」「お菓子，魚，お寿司などを食べた」というものがあった。また，日本語の学習成果を意義

として挙げる回答も見られた。

一方、「意義がある」と回答したものの、その一部に「後悔している」という内容もわずかながら見受けられた。それらは「角間（キャンパス所在地）は市街地から遠い」「国際交流会館はいい場所だが、外国人ばかりで、日本の生活らしくなかった」「与えられた課題・宿題が多くて、日本人との交流が減ってしまった」など、日本人や日本文化に接する機会が減ってしまったことを挙げるものであった。この点からも、本調査の対象となった留学生の関心は、これまで本学でおこなわれた調査が指摘しているように、その多くが異文化交流に向けられていることが推察される。

2. 留学の成果と今後の生活

「留学生活はこれからのあなたの生活にその成果を生かせると思いますか」という設問に対しては、ほとんど全員が「生かせる」と回答している (32/35名)。何が生かせるかという細目 (複数回答可) としては、日本語、人間関係、自己の成長を挙げた回答が、それぞれほぼ同じ程度見られた。

日本語が生かせるとしたのは35名中21名であった。

「いろいろな国の友人ができ、例えば、図書館で新聞の国際記事を読むと、その国の出来事に関心を持つようになった」など、日本人/外国人との人間関係を築けたことを挙げた回答については、日本人との人間関係を35名中22名、外国人との人間関係を同じく22名が挙げている。

自分自身が精神的に成長したことを挙げたのは35名中21名であった。

上記以外の意見としては、「和食が好きになった」「異なる文化・考え方に寛大になった (自国の人間はそうではないから)」「自分の国について質問され、それに答える必要があって、自分の国についても新しいことがわかるようになった」など、文化差について触れた回答が見られた (各1名)。

3. 日本/日本人イメージ

「日本での留学生活で日本人の生活様式や行動などで、学んだことがありますか。あったら、挙げてください」という設問に対しては、35名中29名からの回答があった。この項目では、一人が複数の内容について言及しているケースがあるため、合計は、人数ではなく件数として報告する。

その内容を見ていくと、多かったのは日本人の親切さ、礼儀正しさ、勤勉さ、几帳面さを挙げた回答であった (13件/29名)。「店員・銀行員などが親切」「忘れ物を必ず届けてくれる」「ありがとうをよく使う」「言い方が論理的」などである。一人が、礼

儀正しさと勤勉さの両方を挙げている回答もあった。いずれのタイプの回答にしても、自国の文化と比較した観点から言及したものが多く、その差異が日本人の特徴を際立たせていると考えられる。

一方、「反対に嫌だ、よくないと思う点がありますか。あったら、挙げてください」という設問には、35名中25名が回答した。この項目でも、一人が複数の内容について言及しているケースがあるため、件数として報告する。

25名の回答の中で、複数の留学生が挙げた内容に、「日本人／日本語の曖昧さや婉曲表現についての批判」、「外国人／外国文化への偏見・偏狭さに対する批判」の2点があった。

日本人／日本語の曖昧さ・婉曲さについての批判（4件／25名）は、「本音と建て前。本心で何を考えているかわからない」「優しくしたが心が見えない」などである。しかし、批判ばかりではなく「いいえとはっきり言わないことが、日本人と交流する上では大切なこともある」という意見もあった。これらの意見は、日本文化特有の曖昧さが、留学生には理解しにくい側面を持っていることをはっきりと示している。

外国人／外国文化への偏見・偏狭さに対する批判（7件／25名）の中には、「外国人だからと試着を断られた」という、明らかな外国人差別のケースを指摘したものや、「発展途上国にも魅力的な文化・社会があるのに、そういうことを質問してくれずに、病気とか辛い生活のことばかり訊いてくる」「(日本人の) 大人は、すれ違うとき『あつ』という顔をする」などの意見があった。いずれも、日本人（日常生活の中で接する範囲の市民）の異文化に対する理解の低さを、象徴的にとらえた意見である。

これらの批判とはまた別に、特に日本人の「若者」への批判も見られた（4件／25名）。「つきあい方がその場限りのよう。恋人とつきあっているのに、全く真剣に考えていない様子」「ブランド品に夢中。若者を評価するのは物ですか?」「授業中寝ているのは失礼と言うより、いけないこと」などである。別の設問に対する回答の中で、「日本の学生の勉強の仕方を見ていると、『大変だ』と言っているが甘やかされていると思う」という意見もあった。

日本／日本人イメージについては批判的意見も多く見られるが、「友人や家族に日本に留学することを勧めますか」という設問には、「勧めない」という回答はほとんどなく、9割以上が「勧める」と回答した。

「勧める」(33/35名) とする理由を見ていくと、ほとんどが「日本語を学ぶなら日本に来るべきだ」「異文化を体験することで自国文化を理解できる」などである。別の設問に対する回答でも、自国で学ぶよりも日本で学んだ方が日本語の習得が速いという意見があった。

「勤める」という回答の中には、奨学金や生活費関連の問題が解決できるのなら、という条件を付ける回答も見られた(5名/33名)。「奨学金が取れるなら勤める。なかったら難しいのでは」「物価が高いので、私費だと大変なのではないか」といった意見が挙げられている。

4. 改善すべき点

「後から来る留学生のために、学校に改善してほしいことがありますか」という設問には、学習環境と生活環境の2つに分けて回答を求めた。この項目でも、一人が複数の内容について言及しているケースがあるため、件数で報告する。

学習環境については、35名中12名から回答が寄せられた。複数の留學生が回答した内容として、日本人学生・留學生を問わず、多くの学生と交流を持つ機会がほしいというものがあった(4件/12名)。日本人学生との交流については、ほとんどが日本語を話す機会を持つためと言っている。その他に「銀行や役所の手続きの仕方なども教えてくれるといい」という意見もあった。

生活環境については、35名中29名から回答が寄せられた。内容としては、住むところの問題を挙げている回答が多かった(20件/29名)。「宿舎に日本人も一緒に暮らした方がいい」「国際交流会館では、特定の日本人としか会えない」などは、日本語を話す機会を持つことや、異文化接触との関連での意見である(8件/20件)。

「宿舎の場所が不便」「バスがなくなってしまうと、買い物も不便」などは、住環境そのものについての意見である(12件/20件)。本調査の対象となった留學生の多くが、ほとんどキャンパス内およびその周辺に居住しているため、このような意見が多く出されたと考えられる。

Ⅲ. 考 察

本調査の対象は、比較対象とした過去の調査(松下ら, 2000)の対象者に含まれる大学院での専門教育を目的とした留學生とは異なり、滞日期間が1年と短く、学位の取得よりも、日本語の習得や日本文化の習得・体験に主眼を置いた留學生であった。そのため、回答のほとんどが、「日本語や日本文化」、「日本の習慣」などに関連を持つものとなった。

【留学の意義について】 留学の意義については、ほとんどの留學生が肯定的意見を持ち、しかも内容は異文化体験に集中していることを考えると、短期滞在・日本体験

型留学生の目的である日本語習得や日本文化体験は、十分に達成されていると言えるだろう。特に、「日本は～」ではなく「金沢は～」という意見も寄せられていることは、金沢という土地柄を活用したプログラムが組み立てられていることを示している。

短期滞在・日本体験型留学生の今後の受け入れにおいても、大学の位置する地域の歴史・文化・伝統を生かした独自のカリキュラムを作成し、日本文化についての学習が深まるようにすることが肝要である。

【日本／日本人イメージについて】松下ら（2000）では、留学が自分の人生にどのような影響を与えたかをいくつかの項目に分けて訊いているが、もっとも多く影響を受けたという回答があったのは「日本人イメージ」であり、全体の90%あまりが影響を受けたと回答している。

本調査でも、日本人イメージについては様々な回答が見られた。肯定的な意見は、いわゆる日本人イメージのステレオタイプである特性に寄せられており、内容にはほとんど差異が見られない。例えば、「親切さ」、「礼儀正しさ」、「勤勉さ」などが挙げられている。一方、批判的な意見には多くのバリエーションが見受けられる。このような回答の多様性の理由としては、留学生の自国の文化との違いによるカルチャーショックから出た意見と、日本人の外国人／外国文化への偏狭さ・理解の低さに対する批判の両方が挙げられているためと考えられる。

大学院への留学を目的として来日する留学生とは異なり、短期滞在・日本体験型留学生は、日本語や日本文化、日本の歴史に関心を持って来日するケースが多い。帰国した留学生の日本人イメージは来日前よりも良好なものになっているが、日本社会の閉鎖性や日本人は偏見があるというイメージは帰国後も弱まらずに残っているとする先行研究（岩男・荻原，1988）や、来日1年以内の留学生にイメージの変容が起りやすいという先行研究の結果（松下ら，2000）もあり、短期間のうちに多くの体験をする留学生に偏りのない日本人イメージを形成してもらうためにはどうすればいいか、さらには、好意的イメージの形成や、相互理解・相互交流を促進させるためにはどうすればいいかを、慎重に検討する必要があるだろう。

例えば、東京大学の留学生生活実態調査専門委員会では、(1)地域市民との交流を一層促進する、(2)自治体等との連携を積極的に推進すると共に留学生に対して留学生ボランティアプログラムがあることを周知させ、その活用の促進を図る、という提言をおこなっている。日本人の外国人／外国文化への偏狭さ・理解の低さを改めるためにも、このような考え方によって留学生と地域との交流を勧めることも重要であろう。留学生から寄せられた日本人学生への批判には、人間関係の希薄化や講義中の居眠り

に代表される無気力学生など、現代の日本の若者が抱える問題が浮き彫りになっているものも見られた。これらの批判は、現在日本でも問題となっている事柄を、そのまま取り上げたものと言えるだろう。例えば、人間関係の希薄化については、青少年の交友関係の希薄化を指摘する研究も多い(高木・加藤, 1997)。留學生のこれらの指摘は、留學生の持つ視点が日本人学生の教育についても様々な示唆を与えていることを示しており、看過すべきではないだろう。この観点からも、留學生と日本人学生の交流を促進する方策は、直ちに検討されなければならない。

【改善すべき点】 本調査の対象となった短期滞在・日本体験型留學生は、ほとんどがキャンパスの一角およびその周辺に居住している。そのため、生活面でも不便な思いをしている留學生が多い。キャンパス周辺は店舗も少なく、積雪のある冬季やバスの便が減少する大学の休業期間中は、買い物をするのも不便だろう。また、キャンパス近くに居住する日本人学生が少ないため、日本人学生との交流も少なくなっていることは否めない。

松下ら(2000)の調査では、大学に改善を求める内容について、「入学手続き」、「教育面」、「支援体制」、「その他」の4項目に分けて回答を求めた。このうち「支援体制」と「その他」の中で、日本人学生との交流が少ないことを指摘した意見が、複数の留學生から出されている。これは、留學生にとって重要な奨学金の問題や大学の留學生への対応の問題に次いで多かった(9件/30件)。今回も同じような要望が出ていることを考えると、この問題が依然として解決されないままであることがわかる。交流の方策を考慮する必要があるだろう。現在、留學生を支援する日本人学生側のシステムとしてチューター制度があるが、留学のタイプによってはチューターが見つからない場合もあるので、その点でも日本人学生との交流の機会が少なくなってしまう。

学生交流については、留學生側・日本人学生側、双方から改善すべき問題である。「日本語が話せれば日本人と友人になれるかと思ったが、違った。日本人の友人を作りたいかったが、できなかった。探すだけでなくがんばらなくてはならなかった。たぶん言葉の問題だと思う。日本人の学生は英語が話せない人が多いし、私は日本語が上手ではない」という回答があったが、ここに述べられている、留學生から見た日本人学生の姿は、日本人学生の典型の一例であろう。

さらに、日本人学生に対する調査(金沢大学学生生活実態調査専門委員会, 2002)では、「在学中に留学を希望するか」という問いに対して、留学に関心を示す学生が37.5%、希望しないと回答した学生が44.1%、「学内の学生国際交流団体の存在を知っているか」という問いには、知っているとする学生が29.5%であるのに対して、知ら

ないとする学生は69.0%である。また、「この団体との交流に参加したいか」を訊いた問いにも、参加してみたいとする学生が32.1%であるのに対して、参加したいと思わない、あるいは興味がないとする学生が65.6%にのぼる。このデータから示されるように、留学や国際交流に関心を持っている日本人学生は少数である。大多数の日本人学生は、自らの留学に関心がなく、そのため留学に関連する事柄の認知も低く、したがって他国からの留学生にも関心を持たないのであろう。

留学生センターでは、留学生の授業に日本人学生を招いて一緒に活動をおこなうなどの工夫をしているが、その場での交流はあっても、それ以降の学生同士の交流に発展しないのである。留学生と日本人学生とが一緒に活動する機会を提供するだけでなく、日本人学生の側からの留学生に対する働きかけを積極的に検討すべき時期に来ている。

【参考文献】

- 岩男寿美子・荻原滋 1988 日本で学ぶ留学生 勁草書房
金沢大学学生生活実態調査専門委員会 2002 第4回学生生活実態調査報告書
加藤隆勝・高木秀明 1997 青年心理学概論 誠信書房
松下（八重澤）美知子・中 崇志・林康子・島弘子・櫻田千采 2000 帰国留学生の調査 ―外国人留学生受入れの改善を目指す基礎的調査― 金沢大学留学生センター紀要 3, 85-98 .
東京大学留学生交流委員会・留学生生活実態調査専門委員会 2000 東京大学1999年留学生生活実態調査報告書
東京大学留学生生活実態調査専門委員会 2001 1999年東京大学留学生生活実態調査に基づく現状と問題点及び改善のための提言（最終報告）

【資料】 調査に使用した質問紙（留学生活に関する設問を抜粋）

Ⅲ 留学生活について

- 1) あなたにとって、留学は意義深いことでしたか。
 - 1 意義があった（金沢大学がよかった 金沢がよかった 日本がよかった）
特に意義があったことは＝
 - 2 まあまあ
 - 3 なかった
 - 4 後悔している
理由＝

- 2) 留学生活はこれからのあなたの生活にその成果を生かせると思いますか。

生かせる 分からない 生かせない

理由＝

- 3) 生かせるとしたら、どの点が生かせると思いますか。

日本語 専門教育 日本人と友人になったこと

様々な国の友人ができたこと 自分自身が精神的に成長したこと

その他＝

- 4) 日本での留学生活で日本人の生活様式や行動などで、学んだことがありますか。あったら、挙げてください。

例：時間を守る

- 5) 反対に嫌だ、またはよくないと思う点がありますか。あったら、挙げてください。

例：酔っ払いに寛大

- 6) 友人や家族に日本に留学することを勧めますか。

勧める 勧めない

理由＝

- 7) 日本にいる間、親しくしていた日本人は？

友人 (金沢大学の学生) 金沢大学の学生以外の友人 恋人 ホームステイ先の家族 (里親)

指導教官 留学生関係の事務官 留学生関係の教師

その他：

- 8) 今回日本に来る前に日本に来たことがありますか。

ある：いつ／どこ

ない

- 9) 後から来る留學生のために、学校に改善してほしいことがありますか。

<学習環境で>

例：パソコンがいつでも使えるようにしてほしい。

<生活環境で>

例：宿舎に日本人学生も一緒に暮らしたい。

帰国を控えた短期滞在留学生の調査 ―先行研究との比較による検討―

中崎 崇志・櫻田 千采・松下美知子（金沢大学留学生センター）

要 約

帰国を間近に控えた短期滞在・日本体験型留学生を対象に面接調査を実施し、留学生生活全般と大学の留学生支援に関する分析をおこなった。調査の結果から、留学の意義については、留学生の多くが異文化体験を挙げていることが明らかになった。日本人イメージについては、いわゆる日本人イメージのステレオタイプについて肯定的意見が寄せられる一方、日本人の外国人／外国文化への偏狭さ・理解の低さに対する批判も見られた。日本人学生への批判には、人間関係の希薄化や無気力学生など、現代の日本の若者が抱える問題が浮き彫りになっている意見も見られた。改善すべき点としては、多くの日本人学生と交流を持つ機会がほしいという意見が多く寄せられた。この点については、過去の調査でも同様の意見が挙げられており、留学生と日本人学生の交流を促進する方策を直ちに検討する必要がある。

A Survey of Short-term International Students, who will return to home country soon.

Takashi Nakazaki, Chisai Sakurada and Michiko Matsushita

Abstract

Interview with 35 international students, who stayed in Japan less than 1 year, revealed following facts and problems:

The number one reason for the students to study abroad was to experience the Japanese culture, such as Japanese foods, traditional crafts, and so on.

Mostly, they agreed that the stereotypes of Japanese people are actually true, and that Japanese have a low standard of understanding for foreign cultures.

They also noted attitudes of Japanese students which were related to the problems youths present in society; for example, being apathy toward study.

International students wished that they had more opportunities to contact with Japanese

students. Similar answers were found in the preceding survey, and this stated that exchanges between international and Japanese students should be more encouraged.

Key words: Short-term international student, interview, experience of Japanese culture, exchange system.